

## General Coping Questionnaire (GCQ)特性版の看護者への適用と短縮版利用の可能性について

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 北岡-東口 和代, 佐々木 恵, 森河 裕子, 中川 秀昭   |
| 雑誌名 | 北陸公衆衛生学会誌 = Hokuriku journal of public health                                   |
| 巻   | 33  |
| 号   | 2   |
| ページ | 56-59   |
| 発行年 | 2007-03-01  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/2297/37283">http://hdl.handle.net/2297/37283</a> |

## 原 著

General Coping Questionnaire (GCQ) 特性版の看護者への  
適用と短縮版利用の可能性について北岡(東口)和代<sup>1,2</sup>, 佐々木 恵<sup>3</sup>, 森河 裕子<sup>2</sup>, 中川 秀昭<sup>2</sup><sup>1</sup>石川県立看護大学看護学部看護学科 <sup>2</sup>金沢医科大学健康増進予防医学部門<sup>3</sup>国立長寿医療センター長寿政策科学研究部Applying the General Coping Questionnaire to Nurses and the  
Prospect of the Shortened VersionKazuyo KITAOKA-HIGASHIGUCHI<sup>1,2</sup>, Megumi SASAKI<sup>3</sup>, Yuko MORIKAWA<sup>2</sup> and Hideaki NAKAGAWA<sup>2</sup><sup>1</sup>Department of Nursing, Faculty of Nursing, Ishikawa Prefectural Nursing University<sup>2</sup>Department of Public Health, Kanazawa Medical University<sup>3</sup>Department of Gerontological Policy, National Center for Geriatrics and Gerontology

The dispositional version of the General Coping Questionnaire (GCQ) has been developed especially for university students. The purpose of the present study is to examine the distribution of the scores and the factor structure on the sample of nurses. Furthermore, prospect of usage of the shortened GCQ is pursued. The subjects were 1684 nurses working at 16 psychiatric hospitals. The self-administered survey was carried out with 1291 effective data obtained. The data was obtained using the Japanese research version of the Maslach Burnout Inventory-General Survey, the Nursing Job Stressor Scale, The GCQ, and a medical accident questionnaire. We only used the GCQ data for this study. Emotion expression and emotional support seeking scores were both significantly higher in female nurses than in male nurses. On the other hand, problem solving score was significantly higher in male nurses than in female nurses. The confirmatory factor analysis supported a four-factor oblique model. Four items with a high effective indicator on each factor were selected as a shortened version. The confirmatory factor analysis extracted the same four-factor oblique model as the original. Cronbach's alpha coefficients for subscales were the same as the original. The evidence showed the prospect of usage of the shortened version of GCQ.

**Key words :** The dispositional version of the General Coping Questionnaire (GCQ), The shortened version of GCQ, factor structure, nurses

## I. 緒 言

佐々木・山崎<sup>1)</sup>は、既存のコーピング測定尺度が信頼性・妥当性の証拠を十分に備えていないことを指摘し、新たな尺度としてGeneral Coping Questionnaire (GCQ) 特性版を開発している。GCQは「コーピングとは外的・内的要求やそれらの間の葛藤を克服し、耐え、軽減するためになされる認知的・行動的努力である」というFolkman & Lazarus<sup>2)</sup>の定義に従って作成されている。また、コーピングには安定的側面(特性的)と人と状況との相互作用による変動的側面(状況的)があるが、GCQ特性版は普段のコーピング・ストラテジーの一般的な使用傾向を測定する特性的尺度である。

GCQ開発の手続きとして、まず54項目のGCQ特性版原版(Ver.1)を作成し、大学生を対象(有効回答=124名)とした調査データを分析して項目選定を行っている。その結果から作成した32項目のGCQ特性版(Ver.2)を用いて、再び大学生を対象(有効回答=784名)に調査を行い、因子の妥当性、下位尺度の内的整合性、得点分布の正規性を検討している。また、他のサンプルにおいて、検査-再検査信頼性、構成概念妥当性を検討している。既存の尺度開発研究においては、GCQのような周到手続きを踏み、信頼性・妥当性の証拠を示したものは稀である。したがって、GCQは研究利用に耐えうる数少ない尺度のひとつといえる。

GCQはコーピング・ストラテジーの構造を整理した Tobin

ら<sup>3)</sup>の知見をもとに、4つの明確な下位尺度によって構造化されている。嫌悪な出来事に直面したとき、それをなんとかして解決しようとする‘問題解決’、それを良い方へ考え直したり、自分にとってプラスになることを探そうとする‘認知的再解釈’、そのときの気持ちを表情や態度にあらわす‘感情表出’、人とかかわりの中で自分の気持ちを落ち着かせようとする‘情緒的サポート希求’の4下位尺度である。

佐々木・山崎<sup>1)</sup>における標準化集団は、大学生のみに限られており、労働者や成人一般に対する適用については今後の課題として残されている。そこで、本研究は看護者にGCQ特性版を実施した場合の因子構造や得点分布について検討することを第1の目的とした。また、看護者など対人支援専門職者を対象とした調査では、多忙な業務の関係上、調査の所要時間短縮がしばしば求められる。したがって、本研究では、看護者におけるGCQ特性版の短縮版利用の可能性について、探索的に検討することを第2の目的とした。

II. 対象と方法

1. 対 象

精神科を主とする16病院に勤務する全看護者（看護師、准看護師）とし、合計1684名であった。うち、1520名が回答（平均回収率=90.3%）した。本研究においては、欠損データを除外した1291名（平均有効回答率=84.9%）を解析対象とした。

男性335名、女性956名である。平均年齢は全体では40.8（標準偏差：SD=11.6）歳、男性39.7（SD=9.8）歳、女性41.3（SD=12.2）歳である。

2. 調査の方法

調査に協力が得られた病院の看護部を通して部署ごとに自己記入式調査票を配布し、10-14日間の留め置き調査を行った。

3. 調査の内容

調査票の構成は、Maslach Burnout Inventory-General Survey (MBI-GS)<sup>4)</sup>の研究用日本版<sup>5,6)</sup>、Nursing Job Stressor Scale (NJSS)<sup>7)</sup>、GCQ特性版<sup>1)</sup>、医療事故に関する質問紙、フェイスシートからなっていたが、本研究ではこのうち、GCQ特性版に関するデータを使用した。

GCQ特性版は、各尺度8項目合計32項目である。下位尺度：「感情表出」、「情緒的サポート希求」、「認知的再解釈」、「問題解決」の4因子である。各項目1-5点の5件法で、各下位尺度の得点範囲は8-40点である。

4. 分析方法

GCQ特性版の尺度平均得点を算出し、看護者全体と男女別の値を見た。男女差については、t検定を行った。

GCQ特性版の因子構造については、佐々木・山崎<sup>1)</sup>が行ったGCQ特性版開発時の分析に準じ、確証的因子分析により検討した。各因子は互いに独立したものとする直交モデルと、すべての因子間に相関を仮定する斜交モデルの2つを比較検討した。モデル適合度の指標としてはgoodness of fit index (GFI)、adjusted goodness of fit index (AGFI)、赤池の情報量基準 (Akaike information criterion: AIC)、root mean square error of approximation (RMSEA)を用いた。GFIとAGFIは値が大きく1に近いほど適合度が良いとされ、GFIが0.85以上あることがモデル採択の1つの目安とされている。AICとRMSEAは値が小さいほど適合が良いことを示している。特に、RMSEAは0.05以下であれば適合度が良いとされ、0.10以上ある場合はそのモデルを採択すべきでないとされている<sup>8)</sup>。

分析には統計パッケージソフトSPSS 12.0J (SPSS Inc.)およびAmos 4.02 (Small Waters, Inc.)を使用した。

5. 倫理的配慮

調査対象となる個人の個人情報の擁護、調査の実施によって生じる個人の不利益並びに危険性に対する配慮、調査対象となる者の理解と同意等について、石川県立看護大学倫理委員会の承認を得た後に調査を実施している。調査への協力は自発的なものであり、強制はせず、個人の拒否する権利を保障している。調査は無記名とし、回答後の調査票は各自が封印した後回収している。病院名等の特定情報はすべて匿名化し、機密の保持に努めている。

III. 結 果

1. 看護者のGCQ特性版下位尺度得点

表1に示すように、看護者全体のGCQ特性版下位尺度得点は感情表出21.1点、情緒的サポート希求21.7点、認知的再解釈25.6点、問題解決26.3点であった。下位尺度得点の男女差を見たところ、感情表出と情緒的サポート希求得点は、女性のほうが男性より有意に高かった。一方、問題解決得点は、男性のほうが女性より有意に高かった。認知的再解釈得点については男女の違いは認められなかった。

2. 看護者のGCQ特性版の因子構造

直交モデルと斜交モデルの2種類のモデルによる確証的因子分析を行った。その結果、表2に示すように、直交モデル (GFI=0.85, AGFI=0.83, AIC=3690.88, RMSEA=0.07) よりも、斜交モデル (GFI=0.89, AGFI=0.87, AIC=2471.86, RESEA=0.06) のほうがデータとの適合度が高かった。

表3に示すように、斜交モデルにおける因子間相関は、感情表出と認知的再解釈 (r=-0.03)、感情表出と問題解決 (r=

表1 看護者のGCQ特性版下位尺度平均値、標準偏差、ならびに男女差<sup>1)</sup>

|              | 全体<br>(n=1291) |     | 男性<br>(n=335) |     | 女性<br>(n=956) |        |
|--------------|----------------|-----|---------------|-----|---------------|--------|
|              | 平均             | SD  | 平均            | SD  | 平均            | SD     |
| 1. 感情表出      | 21.1           | 5.2 | 20.2          | 5.7 | 21.4          | 5.0 ** |
| 2. 情緒的サポート希求 | 21.7           | 5.7 | 18.8          | 5.1 | 22.7          | 5.5 ** |
| 3. 認知的再解釈    | 25.6           | 5.4 | 25.5          | 5.6 | 25.7          | 5.4    |
| 4. 問題解決      | 26.3           | 4.7 | 26.8          | 4.9 | 26.1          | 4.6 *  |

\*\*p<.01      \*p<.05  
1)男女差はt検定による

表2 GCQ 特性版32項目版におけるモデル適合度

|       | GFI <sup>1)</sup> | AGFI <sup>2)</sup> | AIC <sup>3)</sup> | RMSEA <sup>4)</sup> |
|-------|-------------------|--------------------|-------------------|---------------------|
| 直交モデル | 0.85              | 0.83               | 3690.88           | 0.07                |
| 斜交モデル | 0.89              | 0.87               | 2471.86           | 0.06                |

1) goodness of fit index

2) adjusted goodness of fit index

3) Akaike information criterion

4) root mean square error of approximation

表3 GCQ 特性版32項目版における因子間相関

|           | 情緒的サポート希求 | 認知的再解釈 | 問題解決   |
|-----------|-----------|--------|--------|
| 感情表出      | 0.45**    | -0.03  | 0.04   |
| 情緒的サポート希求 |           | 0.18** | 0.17** |
| 認知的再解釈    |           |        | 0.79** |

\*\*  $p < .01$ 表4 GCQ 特性版32項目版における影響指数<sup>1)</sup>

| 下位尺度      | 項目No | 項目文                    | 影響指数 | 下位尺度   | 項目No | 項目文                       | 影響指数 |
|-----------|------|------------------------|------|--------|------|---------------------------|------|
| 感情表出      | 2    | 不快を感じていることを態度であらわす     | 0.73 | 認知的再解釈 | 4    | 問題の中で明るい要素を探そうとする         | 0.67 |
|           | 5*   | 思っていることを顔に出さないようにする    | 0.37 |        | 7    | 起こった出来事を肯定的に捉えようとする       | 0.68 |
|           | 9    | やりきれなさを態度に出す           | 0.73 |        | 10   | 嫌な経験の中でも望ましい点に目を向ける       | 0.76 |
|           | 14   | 嫌だと感じていることを表情に出す       | 0.83 |        | 13   | 事態について肯定的に受け止める           | 0.71 |
|           | 20   | 嫌なのだという態度をとる           | 0.78 |        | 17   | 経験していることの中で良い点を見ようとする     | 0.78 |
|           | 23   | 自分の気持ちを表情にあらわす         | 0.82 |        | 24   | 問題について良い方向へ解釈しようとする       | 0.79 |
|           | 28   | 思っていることを態度に出す          | 0.79 |        | 27   | 状況の明るい面を見ようとする            | 0.85 |
|           | 31   | 困っているという顔をする           | 0.75 |        | 32   | 悪い事態の中でも希望がもてそうところに着目する   | 0.80 |
| 情緒的サポート希求 | 3    | だれかになくさめてもらう           | 0.77 | 問題解決   | 1    | 困難を乗り越えるために努力する           | 0.60 |
|           | 8    | 友人に自分の立場を分かってもらう       | 0.63 |        | 6    | 事態が悪化しないように積極的にはたらきかける    | 0.67 |
|           | 12   | 身近な人に励ましてもらう           | 0.87 |        | 11   | 状況が変わるように手をつくす            | 0.75 |
|           | 15   | だれかにあたたかい言葉をかけてもらおうとする | 0.78 |        | 16*  | 直面している状況に対してはたらきかけないようにする | 0.11 |
|           | 18   | 自分の気持ちを親しい人に受け止めてもらう   | 0.79 |        | 19   | 問題解決に専念する                 | 0.76 |
|           | 21   | だれかと一緒にいて安心感を得ようとする    | 0.72 |        | 22   | 悪い状況を打開しようといろいろ試してみる      | 0.76 |
|           | 25*  | 人を頼らないようにする            | 0.24 |        | 26   | 起こった出来事が解決へ向かうように懸命に取り組む  | 0.83 |
|           | 30   | 親しい人に気持ちの支えになってもらう     | 0.86 |        | 29   | 困難な状況を変えるために最善の方法をとろうとする  | 0.84 |

\* 逆転項目 (逆転処理済)

1) 確証的因子分析による

表5 GCQ 特性版16項目抽出後におけるモデル適合度

|       | GFI <sup>1)</sup> | AGFI <sup>2)</sup> | AIC <sup>3)</sup> | RMSEA <sup>4)</sup> |
|-------|-------------------|--------------------|-------------------|---------------------|
| 直交モデル | 0.88              | 0.85               | 1587.48           | 0.10                |
| 斜交モデル | 0.96              | 0.94               | 480.38            | 0.05                |

1) goodness of fit index

2) adjusted goodness of fit index

3) Akaike information criterion

4) root mean square error of approximation

表6 GCQ 特性版16項目抽出後における因子間相関

|           | 情緒的サポート希求 | 認知的再解釈 | 問題解決   |
|-----------|-----------|--------|--------|
| 感情表出      | 0.42**    | 0.01   | 0.09** |
| 情緒的サポート希求 |           | 0.20** | 0.20** |
| 認知的再解釈    |           |        | 0.79** |

\*\*  $p < .01$ 表7 GCQ 特性版16項目抽出後における影響指数<sup>1)</sup>ならびにクロンバック  $\alpha$  係数

| 下位尺度      | 項目No | 項目文                      | 影響指数 | $\alpha$ |
|-----------|------|--------------------------|------|----------|
| 感情表出      | 14   | 嫌だと感じていることを表情に出す         | 0.81 | 0.88     |
|           | 20   | 嫌なのだという態度をとる             | 0.76 |          |
|           | 23   | 自分の気持ちを表情にあらわす           | 0.86 |          |
|           | 28   | 思っていることを態度に出す            | 0.80 |          |
| 情緒的サポート希求 | 12   | 身近な人に励ましてもらう             | 0.85 | 0.89     |
|           | 15   | だれかにあたたかい言葉をかけてもらおうとする   | 0.75 |          |
|           | 18   | 自分の気持ちを親しい人に受け止めてもらう     | 0.80 |          |
|           | 30   | 親しい人に気持ちの支えになってもらう       | 0.87 |          |
| 認知的再解釈    | 17   | 経験していることの中で良い点を見ようとする    | 0.77 | 0.88     |
|           | 24   | 問題について良い方向へ解釈しようとする      | 0.80 |          |
|           | 27   | 状況の明るい面を見ようとする           | 0.87 |          |
|           | 32   | 悪い事態の中でも希望がもてそうところに着目する  | 0.80 |          |
| 問題解決      | 19   | 問題解決に専念する                | 0.76 | 0.88     |
|           | 22   | 悪い状況を打開しようといろいろ試してみる     | 0.76 |          |
|           | 26   | 起こった出来事が解決へ向かうように懸命に取り組む | 0.84 |          |
|           | 29   | 困難な状況を変えるために最善の方法をとろうとする | 0.86 |          |

1) 確証的因子分析による

0.04) の間の相関が有意でなかったことを除き、すべて1%水準で有意であった。感情表出と情緒的サポート希求 ( $r=0.45$ )、認知的再解釈と問題解決 ( $r=0.79$ ) のそれぞれの間の相関が相

対的に高かった。

表4に示すように、各潜在変数から観測変数への影響指数はすべて1%水準で有意であった。

次に、GCQ特性版の短縮版利用の可能性について検討するため、各因子について、先の分析において影響指数の大きいものから4項目を抽出し(表4参照)、全16項目について再度確認的因子分析を行った。その結果、表5に示すように、直交モデル(GFI=0.88, AGFI=0.85, AIC=1587.48, RMSEA=0.10)よりも、斜交モデル(GFI=0.96, AGFI=0.94, AIC=480.38, RMSEA=0.05)のほうがデータとの適合度が高かった。因子間相関は、表6に示すように、感情表出と認知的再解釈の間の相関が有意でなかった( $r=0.01$ )ことを除き、すべて1%水準で有意であった。表7に示すように、潜在変数から観測変数への影響指数は0.75-0.87、下位尺度におけるCronbachの $\alpha$ 係数は0.88-0.89となった。

#### IV. 考 察

まず、看護者のGCQ特性版下位尺度得点の結果を佐々木・山崎<sup>1)</sup>の大学生784名を対象とした結果と比較する。大学生では感情表出23.04(SD=6.34)点、情緒的サポート希求24.31(SD=6.61)点、認知的再解釈25.82(SD=6.13)点、問題解決26.43(SD=5.11)点であった。単純比較となるが、認知的再解釈と問題解決得点については大学生と看護者では大きな違いは見られない。他方、情緒的サポート希求と感情表出得点は大学生のほうが看護者より高い。この違いは年齢、学生と職業人などさまざまな要因による違いと考えられる。今後の研究により、さらに明らかにしたい課題である。本研究においても、GCQ特性版下位尺度得点の男女差を見た。感情表出や情緒的サポート希求では男性より女性のほうが得点が高く、問題解決では女性より男性のほうが得点が高いという結果を得た。これは大学生を対象とした先行研究<sup>1)</sup>の結果と同じ男女差のパターンである。特に、情緒的サポート希求における男女差は、これまでの研究<sup>1),9)</sup>において一貫して検出されているものであり、本研究はこの点について確認づけている。

GCQ特性版を看護者に適用したところ、看護者においても大学生と同様に、因子間に相関を仮定した斜交モデルが最も適合していることが示唆された。しかし、因子間の相関を大学生における結果と比較してみると、認知的再解釈と問題解決の間の相関が特に高くなっている。情動へのコーピングである感情表出と情緒的サポート希求、問題へのコーピングである認知的再解釈と問題解決の間の相関が相対的に高くなるのは当然の結果と考えるが、逆に認知的再解釈と問題解決というコーピングが異なる因子として独立したものであるかが問われることにもなる。今後、さらに論議すべき点と考える。

本研究では、GCQ特性版の短縮版利用の可能性についても検討した。GCQ特性版32項目のうち、影響指数の大きいものから16項目を抽出した場合の因子構造について検討したところ、原版と同様、直交モデルよりも斜交モデルにより高く適合していた。影響指数や各下位尺度のCronbachの $\alpha$ 係数を検討したところ、原版と同様の値を示していた。以上により、GCQ特性版短縮版利用の可能性が示唆された。しかしながら、16項目のみで調査を実施した場合の因子構造など信頼性・妥当性については今後の課題として残されている。これらについて検討していくことが求められる。

#### 文 献

- 1) 佐々木恵, 山崎勝之: コーピング尺度(GCQ)特性版の作成および信頼性・妥当性の検討, 日本公衆衛生雑誌, 49(5), 399-408 (2002).
- 2) Folkman S., Lazarus R. S.: An analysis of coping in a middle-aged community sample, *Journal of Health and Social Behavior*, 21, 219-239 (1980).
- 3) Tobin D. L., Holroyd K. A., Reynolds R. V. et al.: The hierarchical factor structure of the Coping Strategies Inventory, *Cognitive Therapy and Research*, 13, 343-361 (1989).
- 4) Maslach C., Jackson S. E., Leiter M. P.: *Maslach Burnout Inventory Manual* (3rd ed.), Consulting Psychologists Press Inc., Palo Alto, CA, 1996.
- 5) Kitaoka-Higashiguchi K., Nakagawa H., Morikawa Y. et al.: Construct validity of the Maslach Burnout Inventory-General Survey, *Stress and Health*, 20(5), 255-260 (2004).
- 6) 北岡(東口)和代, 荻野佳代子, 増田真也: 日本版MBI-GS (Maslach Burnout Inventory-General Survey) の妥当性の検討, *心理学研究*, 75(5), 415-419 (2004).
- 7) 東口和代, 森河裕子, 三浦克之, 西条旨子, 田畑正司, 中川秀昭: 臨床看護職者の仕事ストレスについて一仕事ストレス測定尺度の開発と心理測定学的特性の検討, *健康心理学研究*, 11(1), 64-72 (1998).
- 8) 豊田秀樹: 共分散構造分析入門編-構造方程式モデリング-, 170-188頁, 朝倉書店, 東京, 1998
- 9) Sasaki M., Yamasaki K.: Dispositional and situational coping and mental health status of university students, *Psychological Reports*, 97(3), 797-809 (2005).

著者への通信先: 北岡和代, 〒929-1212 石川県かほく市中沼ツ7-1 石川県立看護大学  
TEL 076-281-8389 FAX 076-281-8386

Reprint request to: Kazuyo Kitaoka, Ishikawa Prefectural Nursing University, Tsu 7-1 Nakanuma, Kahoku-city, Ishikawa, 929-1212, Japan